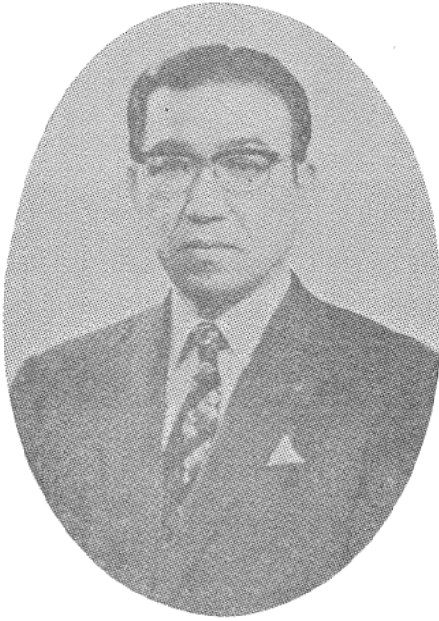


企業紹介

「ボイラと共に60余年」

(株) 平川鉄工所のあゆみ

平川 恵一*



わが社は明治45年に創業し、昭和22年に個人企業平川鉄工所を法人組織に改組して現在に至っている。わが社60余年の社歴は、日本の中小ボイラの発展と共に、歩んできたものといえよう。

祖父種吉は事業の創業者であり、父久一は町工場の存在から、MPボイラを始め種々の製品について研究開発を行い、今日のボイラ専門メーカーとしての地盤を築き上げた。一昨年父は他界し、その事業を私は三代目として受継ぐことになったが、普通三代目になると、より栄える企業もあるが、創業者や二代目が育てた事業を支えきれず自滅してしまう例もあり、むしろ後者の方が多いかも知れないからその責務は重大である。創業者の祖父は常に「人に迷惑をかけてはいけない」といい、これが父や私に対する躰の根本的な考え方であった。これは事業の上にも経営者の使命として重要なことで、今日

でいう社会的責任である。前社長は、企業は社会に貢献するものであると、その精神に徹していた。初代、二代目のそのような精神を受継いで企業を永續し発展せしめるのが、私の使命であると考えている。

前社長は、大正9年工業学校を卒業した当時わが国のボイラ業界は、英国始め欧州から輸入されているのが通常で、丸缶でもランカンボイラがわずかに作られている現状であったため丸缶の製作に熱を燃やしその製作に専念し、ついに京都府立花園精神病院へ納入し得たのは大正10年で、これがわが社のボイラ製作第1号機であった。当時のボイラ熔接技術はきわめて幼稚な時代であったから、その研究に注目し、大阪工業試験所から熔接の破壊試験を引受けてこれを行い、また発電所用水圧鉄管を鉸鉸から熔接製にかえ、これに成功するなどボイラ熔接改良の基礎的技術を早くから取入れ、製作技術の向上に努力している。

その後昭和8年には、わが国に入って来た産業用の機関車型ボイラをいち早く製造し、国内はもとより満州朝鮮方面にも納入している。昭和17年新たに25 atgの平川水管式ボイラを開発し、第1号機をダイハツ工業に納入したが、戦後そのボイラが廃缶になったので、わが社の記念とし今も保存されている。戦時中は海軍の管理工場として、国家の要請による種々な製品の製作に協力していたが、終戦に伴い一般産業界を始め、ボイラ業界においても、茫然自失する中であって、わが社は産業復興を目指し、一日として休むことなく事業を続行している。当時火力発電は停滞していたが、幸い水力発電能力があったので、最も手早い復興対策は、電力を熱源としてボイラを稼働させることであるとして開発に着手したが、関西における高圧電気ボ

* 平川恵一 (Yoshikazu HIRAKAWA), 株式会社平川鉄工所, 取締役社長

イラ製造の嚆矢はわが社であった。これは米軍第13総合病院向けとして1000Kw×3300v5台を製作し、引続き各産業部門にも、多く納入している。また進駐軍は良質の石炭を使って、ぬくぬくと生活していたが、民間には燃えにくい亜炭泥炭しか出回っていなかった。戦争に負けたみじめさで、前社長はこれに奮起し、燃えないといわれる低質炭を、燃焼機の改造によりなんとか燃やし、戦後産業復興の一助となればと決意し、並々ならぬ苦労と努力を重ね、低質炭燃焼装置・低品位炭ガス発生装置と矢継早に開発し、製品化して世に出している。このように戦後のわが国の燃料事情は非常に不安定で低質炭、電気、重油、石炭そして再び重油と再三政策の転換があった。ボイラメーカーはエネルギー事情の動向を洞察し、その要望を充足させ、常にその時々のボイラと燃焼機をマッチさせて、性能を高めることに最大の努力をしていた。以上わが社にとっては、創業時から戦後27年頃までが、揺籃期または基礎造り期といえる。

その前後から国土の資源温存と熱経済の向上を目指しての、社会的な要望が高まり、昭和27年には熱管理法も制定された。当時わが国の中小ボイラは往昔外国から導入されたボイラ形式のままかまたは伝熱面に若干の手を加えた程度のものであったため、低効率のボイラから高効率の新型ボイラの出現を望む社会的機運があった。わが社は過去の技術開発の旺盛な勢いをもってこれに取り組む、昭和28年新型ボイラの開発を行った。それは燃焼ガス3回方式をとった、MP 100型炉筒煙管ボイラで、国産第1号機であった。この第1号機は現在も東京の伊勢丹百貨店で稼働している。これに改良を加えMP 300型を30年に新型ボイラとして発表し、特許を得ることになったが、このボイラは当時のボイラが効率50~60%であったものを、石炭焚で80%以上、石油焚で85%以上にしたという国産として理想的なボイラであった。MPとは、MULTI PASSAGED BOILERのイニシャルであるがMONEY PRODUGING BOILERと客先から歓迎されるほど燃料の節減になり、一躍産業界の激賞を受けることになった。

その後昭和35年MP 500型、38年MP 700型

を、さらに自社バーナとしてMP 3 Tバーナなどをそれぞれ開発し、ボイラ・バーナユニットの商品化をして、改良を加えて来た。43年には、戻り燃焼方式と特殊煙管を組合せたMP 800型を開発した。これは世界の最尖端をゆくもので、海外へもMPボイラの声名をより高めたものである。今日では機械工学便覧あるいは学校の教科書にわが社の炉筒煙管ボイラが資料として掲載され教材となっているのはこれらのボイラである。前社長が炉筒煙管ボイラの発明により、その功勞として37年紫綬褒章が授与される榮譽となった。今日ではこの炉筒煙管式もだんだんと大型化し、本年納入した東京丸の内地域暖房用として、都市ガス焚25T/Hという従来想像もしなかった大容量化している。納入先も宮内庁新宮殿を始め超高層ビル、地域暖房、各産業用と多岐にわたっている。また海外についても41年台湾次いで韓国、ブラジルとそれぞれのボイラメーカーへ技術輸出を行い輪を世界に拡げている。

また水管式ボイラ分野においても、従来は10~15T/Hまでが工場生産し、可搬式とされていたが、43年わが国で最初の25T/Hの可搬式WTP型水管式ボイラの開発に成功し、商品化している。また従来熱媒体として使用していたPCBが公害問題としてクローズアップされたため、食用油業界の要請により、最高使用圧力100気圧、自然循環方式のHPG高圧蒸気発生装置を開発し、PCB方式に代る加熱源として好評を得ている。

その他ボイラの研究開発の技術を生かし、公害防止分野にも進出を企画して、37年から着手しているが、これは一般に未だ関心のなかった頃のことである。この方式の一つは、工場から出されるアルカリ性排水をボイラの排ガスと適切に接触させ、排ガスを一挙に浄化するものでガスリアクタ式排水処理法として発表した。本構想に係る類似装置が今日続々と出現しているが、わが国で初めて、わが社が実用化装置としてかかる装置の先鞭をつけたものである。これを端緒にわが社の環境部門は、大気汚染防止、排水処理、スラッジ処理等の分野で商品を出している。

生産と技術

昭和37年、創業50年を記念して滋賀工場を建設し、ボイラ量産工場として、生産をライン化し、専用機を設置して合理化を進めた。工場の内容は、当時国内唯一のもので、海外からも研修として多くの訪問を受けた。

以上はわが社の特徴と今日までの歩みであるが、その底に流れるものは、ボイラを通じて社会に貢献せんとする前社長の精神である。冒頭に記述したが、後継者として私の重大な任務は創業者のこの意志を尊重し、それを継ぐことだと考えているが、ただ単に受継ぐというのではなく、常にその時代にマッチした新しい感覚で、経営を行わなければならないことはいまでもないし、根本精神は忘れてはならないとい

うことである。これは今日つぎのような社是として、全社員にも滲透するようにしている。社是は「信頼される会社、信頼される人間、信頼される製品」であり、得意先、金融関係、仕入先その他関係先の信頼があってこそ、全従業員の安心、楽しみおよび希望があり、企業も進化発展すると思う。創業以来60余年、この間皆様のご支援、ご愛顧に感謝し、また先輩の残された有形無形の財産を受け、今後は省資源、省エネルギーの世界的要請にこたえて、一層新技術の開発にたゆまない研鑽を積み、これらのご恩に報いたいと考えている。

以上